

## 美術科

## 表現と鑑賞を一体として扱う中学校美術科教科課程の提案

—主体的に学びをつなぎ、美的判断力を働かせようとする生徒の育成をめざして—

辻 政宏 森 弥生

美術科は形・色・材料を仲立ちとして学ぶ教科である。小学校から積み重ねてきた美術の学びと、他教科の学びを含めた日々の学びとを主体的につなぎ、美的判断力を働かせて日常を多角的にとらえようとする生徒を育成するための、美術科教科課程のあり方を提案する。

### 1 主題設定の理由

#### (1) 第1次、第2次研究との関連から

1次では、研究主題「鑑賞学習を手がかりに探る小中の系統性を生かした中学校美術科の教科課程のあり方」～過去の学びを生かして主体的に学びを積み重ねる生徒の育成をめざして～と題して研究した。中学校美術科の役割を、それまでの日々や小学校図画工作の学習などで無自覚に積み重ねられてきた美術ならではの学びを自覚化させて新たな学びを再構成する段階であると規定し、鑑賞の学習場面で教育実践を行ったその結果、生徒は積み重ねられてきた学びを自覚した上で、新たな学びとして再構成し活用したことが確かめられた。課題として、鑑賞学習で獲得した新たな学びが表現の学習にどのように活用されていくのか明らかにすることが残った。

2次では、研究主題「日々のさまざまな学びを視野に入れた中学校美術科のあり方」～学びを結びつけながら造形的な感性を深化・拡充しようとする生徒の育成～のもと、他教科の学びを含む日々の学びを結びつけて活用することで、美術科の学びがより生きて働く力として深化・拡充するという仮説に基づいて研究した。その結果、生徒は日々の学びと美術科ならではの学びの価値を自覚し造形的な感性を深化・拡充することができた。

これまでの成果と課題を踏まえ、第3次研究では、「縦の学びを自覚し・横の学びと結びつけながら再構成された美術の学びを活用する力=主体的に学びをつなぐ力」を育成するにはどうすればいいのか、またそれは従来とはどのように改善された教科課程によって育成できるのかという2点を明らかにして、これからの中学校美術科の教科課程のあり方を提案する。

#### (2) 「表現と鑑賞を一体として扱う中学校美術科教科課程」とは

第1次研究紀要 32にあるように、私たちは1次研究のスタート時からこの学校研究のゴールを教科課程の提案としてきた。中学校美術科がかねてから批判されてきた表現偏重の教科課程から脱却できないまま、授業時数がほぼ半減する平成14年度新教育課程完全実施を控え、生徒が主体的に美術科の学びを「積み重ね」「結びつけ」「つなぐ」力を身につけるのに、従来の教科課程編成の原理に拠ったのでは実現しないと考えたからである。

また、平成8年度学校研究「主体的な学習の深化・拡充をめざして」において、表現学習を行うにあたって過去の学びを情意・認知両面から振り返る学習が、生徒一人一人の美的価値意識に大きく寄与することが明らかになっていた。そこで、1次研究では従来最も指導されてこなかった鑑賞学習を軸として、鑑賞と表現を一体とした1年間の教科課程を組み研究を進めた。

2次では1次で確かめた教科課程をベースにして、鑑賞と表現を一体とした単元を構成し、その上に日々の学びの自覚化がなされるような指導を組み込んだ。言い換えると美術科内での横の学びの結

## 美術 2

びつけとの二重構造で教科課程を組んだこととなった。その結果美術科の中での学びの結びつけが生徒に自覚されると、表現の力は鑑賞の力を高め、鑑賞で得たものの見方考え方が新たな表現に生かされるというプラスの循環が生じて、日々の学びとより深く結びついて学習を深化・拡充することが確かめられた。

第3次では、それらを再構成し、生徒の内側で、表現の能力と鑑賞の能力が縦軸と横軸で間断なく働くような授業構造の考え方を示そうとしている。表現や鑑賞の能力は、それぞれ独立した活動や順序性によって身に付けるものではなく、表現と鑑賞が一連のものとして、表す活動とみる活動が行きつ戻りつしながら身に付けていくものである。そこで表現・鑑賞のそれぞれがもたらすものを生徒に自覚化させ活用させるような学習を展開することにより、生徒の造形的な感性をより豊かに育むことができると考え、「表現と鑑賞を一体として扱う」とした。

### (3) 「主体的に学びをつなぐ生徒」について（第3次共通研究主題との関連から）

本研究の共通研究主題から、美術科では「主体的に学びをつなぐ生徒」の姿を次のようにとらえた。

美術の学びと日々の学びとを自覚し、事象・対象からよさや美しさなどの価値や心情を自己の価値意識に基づいて感じ取ることができる生徒

美術の学びや日々の学びを活用して豊かに発想し、自分の表現が実現できるように構想することができる生徒

形・色・材料を創造的に駆使する能力を身につけ、自分のテーマに沿って創意工夫しながら表現・鑑賞することができる生徒

表現や鑑賞で学んだことを生かし、日常のあらゆる場面で造形的な感性を働かせ、豊かに生きようとする生徒

つまり、図工美術で積み重ねてきたこれまでの学びを自覚し活用しようとするとともに、他教科を含む日々の学びを意識することで、美術の学びを深化拡充しようとする生徒の姿をいう。

美術科では、上記のような生徒を育てるために1次2次の研究を通して、一人一人の生徒が造形的な感性を高める諸能力を自覚化できるようにすることと、美術以外で学んだこと（他教科の学びを含めた日々の学び）を意識せざるを得ないような学習を、表現と鑑賞を一体として扱う単元学習の上で設計して研究を重ねてきた。

そこで、3次研究では、主体的に学びをつなぐ場として、表現と鑑賞を一体として展開する教科課程を設計し、そのもて「主体的に学びをつなぐ生徒」の姿を次の5つの場面からとらえている。

積み重ねてきた美術での学びや日々の学びを自覚し関係を整理する。

関係の整理から導き出された形・色・材料を通したものの見方とらえ方を習得する。

の状態のもとで積み重ねてきた美術の学びや日常の学びを活用する。

形・色・材料を通した自分なりの対象事象の見方とらえ方を自覚する。

形・色・材料を通して日々の学びを再構成する。

### (4) 「美的判断力を働かせようとする生徒」とは

美術科では、造形的な学びを積み重ねるばかりでなく、他の学びと結びつけることにより知識の裏付けを得たり多角的な視点を加えたりしながら、知性と一体化した人間性や創造性の根幹をなす資質としての感性がより豊かに確実に身に付いていくと考える。この造形的な感性は、ただ絵を描いたりものをつくったりする行為だけでは育たない。形・色・材料の価値に気づかせ、生徒自身が形・色・材料をどのように組合せどのように活用すれば、自分の伝えたいことが表現できるかを自覚させる意図的な指導がなされなければならない。そこで本研究では、形・色・材料を通して、日常を多角的にとらえることのできる生徒をめざし、そのために必要な資質や能力として「それぞれの美的価値意識に基づいた美的判断力」を美術科でこそ育成すべき学力とした。そして、自分なりの美を見出そうとする価値意識のもとに、美しいものよいものを希求し続ける生徒の姿を、「美的判断力を働かせようとする」とした。

「美的価値意識」とは、自分なりの美に対する鋭敏な感覚や美を価値あるものとして尊重しようと

する心の働きのことである。そして、「美的判断力」とは、美しいものを見分けそれらを適切に価値づけたり選択したりすることのできる能力のことである。この美的判断力は、先の美的価値意識が形成された上に育まれる能力でなければならない。つまり形・色・材料のフィルターを通して日常の対象事象をとらえ、自分なりの形・色・材料に対する価値意識を自覚し活用するための力である。この力の基礎となる形・色・材料の持つ機能や、その機能を駆使して表現されたものの中に共通して備わったよさや美しさといった造形文法を読み取り使いこなすことこそ、後続の美術の学習や他教科他領域を含む日常において活用できる力と考える。

さらに、この「美的判断力」には、次のような「これまでの学びを運用するための力」が含まれている。

- ・対象事象のよさや美しさを形・色・材料を通して分析的に見る力
- ・形・色・材料を駆使して、表わしたい感じや伝えたいことを創造的に表現する力

後続の美術の学びだけでなく他教科や日常において美的判断力を活用する生徒として、次のような姿を思い描くことができる。例えば、文学作品などを鑑賞する際に、文章のレイアウト（構成）や文字の書体（形態）などを意識しながら、イメージを豊かに広げその作品のよさを深く味わうことができたり、データを読み取ったり処理したりする際に、数値だけに頼るのではなく、グラフなどの図像から理解し、より適切な作図によって視覚化伝達できたりする生徒の姿である。

## 2 研究目標

必修美術科において、生徒の造形的な美的価値意識に基づく美的判断力を育成するための教科課程（授業構造）のあり方を研究する。

## 3 研究仮説

授業において、以下のような美術の学びと日々の学びを自覚化させる学習を、表現と鑑賞を一体とした教科課程のもとで展開することは、美的価値意識を高め、主体的に学びをつなぎ美的判断力を働かせようとする生徒の育成に有効である。

題材を設定するに当たって、美術科で付けさせたい学力と情意面から目標を洗い出し、表現と鑑賞を一体として単元化した教科課程のもとで ～ の学習過程を踏ませる。

ただし、 は順序性のあるものではない。

単元を構成する題材の導入段階において、日常の学びを意識する。

単元を構成する題材の構想段階において過去の学びを自覚する活動を行い、主題と形・色・材料による表現との関係を整理、分析する。

に基づいてそれぞれが設定した主題と形・色・材料との関係を自覚し、新たな学習目標達成の構想を練る。

以上の学習過程を通して確かめられた形・色・材料に対する美的価値意識のもとで、過去の学びと日常の学びを活用して学習を進める。

単元の最終段階で、新たに獲得したそれぞれの価値意識に基づく美的判断力を働かせて自他の表現や鑑賞の様子を評価する。

## 4 研究計画

### (1) 全体の計画

本研究で設定した仮説を検証するために、平成15年度第3学年5クラスを対象とし、平成15年度3学期に仮説に基づく授業実践を行い、以下のような方法で考察する。

美術科において日常の学びを意識しているかどうか事前調査で行った同じ内容の事後調査を行

美術 4

い、生徒の意識の変化を検証し考察する。

検証軸として対象生徒の前期後期の5段階評定の合計を上位群(96人)下位群(96人)にグループ化し、それぞれの群で仮説が有効であったかを比較検証する。

上位群下位群の生徒が授業で用いたワークシートの記述や作品などを分析し、日常の学びをつなぎ形・色・材料を自覚的に活用できたかどうかを考察する。

(2) 研究日程

平成15年12月	導入授業 事前調査	1時間
平成16年1月	主題の構想 参考作品の鑑賞	3時間
2月	アイディアスケッチ	2時間
	制作	3時間
3月	相互鑑賞、事後調査	1時間

5 研究経過

(1) 教科課程について -これまでの取り組みから-

美術科では、1次研究から先行的に鑑賞と表現を一体化を試みる教科課程の下で授業を行ってきた。(資料1)さらに、本校では平成9年度より地域の資源である美術館と連携して鑑賞授業を行ってきた。生徒が生活する日常に存在する美術館の装置としての機能を生かすために、事前事後の授業を周到に設計し、実作品の持つ造形的な力を最大限に引き出すことによって、教室内での授業では得られなかったいくつかの成果をみることができた。

その一例を紹介する。2次研究の途上で、本研究対象の生徒が2年生の時、大原美術館での鑑賞活動によって生徒の形・色・材料に対するとらえ方が大きく変容したことを目の当たりにした。その行き帰りの道中を生徒がデジタルカメラで記録したもの(図1、2)を比較してみると、生徒の被写体のとらえ方の変容は劇的なもので、明らかに造形的な思考が働いていることが第三者にも理解できるものであった。いわゆるスナップ写真から、被写体の中に造形美を見出そうとする創造的な表現行為の結果としての映像に変化していた。日常を多角的な視点でとらえ主体的に美しさを見いだそうとする姿は、まさに美的価値意識が高まり美的判断力を活用しているものであった。この事例は、鑑賞の重要性と、表現と鑑賞が表裏一体であることを如実に証明するものであった。(資料1 2年単元「倉敷デジタル美術散歩」)



図1 鑑賞前



図2 鑑賞後

表現と鑑賞を一体的に扱うことで、生徒は、鑑賞によって高められた形・色・材料の価値意識のさめやらぬうちに、表現することで美的判断力を活用することになり、自分の主題に沿った形・色・材

料を選び出すことの大切さを自覚し活用しようとするのではないか。美術の学習過程において鑑賞する機能と表現する機能が生徒の内では有機的に結びついたとき、生徒は積み重ねてきた美術の学びと日々の学びとの関係を自覚することになり、自ずと造形的な美に対する価値を意識し（美的価値意識）それに基づく美的なものを批評しようとする判断力（美的判断力）を身に付けていくことができるものと考えられる。

## （２）「自我像」制作を題材に選んだ理由

自画像制作が、思春期の生徒たちにとってたいへん意義のある題材であることは、各教科書が改訂毎に必ず取り上げていることなどからうかがえる。鏡の中の自分としっかり対峙させ自己の内面に語りかけさせながら客観的にとらえさせようとする本題材は、発達段階とマッチした価値のある題材である。さらに、自画像制作は、自己表現のもっとも結実した題材であり、生徒が自分自身をいろいろな切り口で自己分析することで主題を明確にしないと、形や色に効果的に変換することはできない。つまり、美術科の学びを活用しようするとこれまでの日常の様々な学びをつなげざるを得ない題材である。そこで本題材では、自分という対象をさまざまな視点でとらえ直し分析しながら、自分というものを形・色・材料を通して見つめる過程で学びが結びつけられると考え、「自画像」ではなく「自我像」とした。そして、本題材を鑑賞と表現を一体とした教科課程のもとで展開することによって、美的価値意識を高め美的判断力を働かせようとする次のような生徒の姿を確かめることができるのではないかと考えた。

- ア 形・色・材料に対する価値意識を高める。
- イ テーマに沿った形・色・材料を収集し精選しようとする。
- ウ 形・色・材料を駆使して、自分のテーマを創造的に工夫しながら表現しようとする。
- エ 日常を形・色・材料を通して多角的にとらえようとする。



制作の様子



## 6 授業計画

### (1) 授業の構想

全体編の「学びをつなぐ」を支える5つの場面と美術科3次研究との関連から、日常の学びと美術の学びの関係を自覚させるための学習段階を示した。

積み重ねてきた美術での学びや日常の学びを自覚し関係を整理させる。

関係の整理から導き出された形・色・材料を通したものの見方とらえ方を意識させる。

の状態のもとで積み重ねてきた美術の学びや日常の学びを活用させる。

形・色・材料を通した自分なりの対象事象の見方とらえ方を自覚させる。

形・色・材料を通して後続の学習や日常の学びを再構成させる。

表2

全体編	美術科における場面	本題材における5つの場面
既存の「知」の自覚  <b>導入</b>	積み重ねてきた美術の学びや日常の学びの関係を整理して自覚する。	主題の発想において <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 題材と日常との関係を整理し分析する中で、主題を構想する。</li> <li>・ 題材と日常との関係の中から主題を構想できることの自覚。</li> </ul>
既存の「知」と新たな「知」の関係を把握  <b>発想・構想</b>	日常の学びと美術の学びの関係を整理し分析することにより、新たな見方とらえ方ができることを自覚する。	自画像作品の鑑賞において <ul style="list-style-type: none"> <li>・ これまで身につけてきた鑑賞の能力を生かし、図像から読みとれる情報を言語として収集し、形・色・材料との関係に着目させながら主題を分析する。</li> <li>・ 日常と形・色・材料の関係から主題が読みとれることの自覚。                          配色カードの使い方について</li> <li>・ これまで身につけてきた色の感情効果について、過去の学びを自覚するとともに、自分の使いたい色を選ぶ方法としての配色カードの使い方を知ることにより、色への価値意識を高める。</li> </ul>
既存の「知」の活用  <b>鑑賞</b>	新たなもの見方とらえ方のもとで美術や日常の学びを活用する。	多様な表現方法による自画像作品の鑑賞において <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 形・色・材料と主題との関係から鑑賞し、個性と表現方法の多様性との関係に気付く。</li> </ul>
新たな「知」の習得  <b>表現</b>	形・色・材料を通した自分なりの事象対象の見方考え方を習得する。	「自我像」の構想において <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 主題を表すに必要な形・色・材料を収集する。                          制作において</li> <li>・ 主題と形・色・材料との関係を意識して、構想を見直したり修正しながら、形・色・材料を駆使して創造的に表現する。</li> </ul>
新たな既存の「知」の群の再構成	形・色・材料を通して日常を多角的にとらえるようになる。	後続の学習や日常において <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 主体的に形色材料を意識して日常を多角にとらえるようになる。</li> <li>・ 美的価値意識に基づいて美的判断力を働かせるようになる。</li> </ul>

## 指導展開例

本 時 案 (計画 第1次の第2時)		
目 標	自画像の参考作品について、友だちの意見を参考にしながら鑑賞し、作者の思いが形・色・材料に表現されていることを確認することができる。 「自分らしさ」を象徴するキーワードのイメージを形・色・材料に変換することができる。	
学習活動	教師の働きかけと留意点	備考
1 前時までの学習内容を確認し、本時の目標を知る。	1 前時までの取り組みを振り返らせ、「自分らしさ」を象徴するキーワードが明らかになっているかどうか、班内で互いに確認させながら関心を高める。	<u>関心意欲態度</u>
2 参考作品について互いの意見を参考にしながら鑑賞していく。	2 多様な表現によって制作された自画像の参考作品を各班ごとに配布し、そのうちの1枚について鑑賞させる。 対話形式による鑑賞活動を行い、作品から読みとれる情報を言語として収集し関係を整理させる。 <b>日々の学びの活用</b> お互いの意見を参考にしながら、形・色・材料との関係に着目させながら主題を分析する。 形・色・材料にその作者が思いが表現されていることを確認する。 <b>美術の学びの自覚化</b>  その他の表現による自画像を鑑賞させ、自分の思いを表現するためには主題にあった形色材料を選ぶことが重要であることに気づかせる。 <b>学びの結びつけ</b> <b>美的価値意識の形成</b>	<u>鑑賞の能力</u> <u>関心意欲態度</u> ワークシート 参考資料
3 キーワードのイメージを形・色・材料に変換する。 (1) 集めるための方法を確認する。	3 「自分らしさ」を象徴するキーワードから連想されるイメージをどのような形・色・材料に変換すればよいか考えさせながら、以下のような方法で収集させる。 (1) 例を示しながら、次の方法を紹介する。 形 ・スケッチさせる。 ・印刷物を利用させる。 ・必要に応じデジタルカメラで記録させる。 色 ・配色カードや印刷物から紙片をはる。 (配色カードの使い方を説明する。) ・色鉛筆などで彩色する。 材料・描画材料やタッチを生かしたドローイングで。 ・材料そのものを貼り付けさせる。 ・フロッタージュさせる。	<u>発想構想</u> <u>関心意欲態度</u>
(2) キーワードからイメージされる形・色・材料を集める。	(2) キーワードが形・色・材料とつながりにくい生徒には、さらにイメージを広げたり、類義語や対義語などを調べさせたりして、連想しやすくさせる。 <b>学びの結びつけ</b> <b>美的価値意識に基づく美的判断力の活用</b>	鏡 デジタルカメラ 色鉛筆 コンテ はさみ のり 辞書類
4 次時の予告を聞く。	4 次時より、集めた形・色・材料を、自分のテーマをより明確に表現するために、強調やデフォルメ、簡略化や省略しながら構想を進めていくこと、必要な資料や材料を準備しておくことを伝える。	

## 7 結果と考察

(1) 以下のようなアンケートを授業前後に行った。さらに集計結果についてT検定を行い、有意差の有無を示した。

表3

	質 問 項 目	上	下	全
1	最近、自分のことを真剣に考えたり見つめたりしようとしています。	有	有	有
2	自分のことを真剣に考えたり見つめたりすることに興味はありません。	有		有
3	いろいろな作家の自画像作品を見るのが好きです。	有	有	有
4	一度は、自画像を制作してみたいと思います。	有	有	有
5	自画像とは、鏡を見ながら自分の姿形をありのままに写し取るものだと思います。	有	有	有
6	自分そっくりに自画像を制作できなかったら楽しくないと思います。	有		有
7	自画像で、「自分」の内面までも表現できるとは思えません。	有	有	有
8	形や色、材料で、自分の内面を表現することは楽しいと思います。	有		有
9	自画像を制作することは、今の「自分」を見つめるよい機会になると思います。	有	有	有
10	自画像の制作を通して、「自分」を見つめることは意味のないことだと思います。		有	有
11	日常や他教科などで経験したり学んだりしたことを通して自分を見つめると、これまで気づけなかった自分を意識するようになると思います。	有		有
12	自画像を制作するなら、平面作品（絵画とかCGなど）を発想します。			
13	自画像を制作するなら、立体作品（彫刻とかオブジェ）を発想します。			有
14	自画像を制作するなら、平面と立体を合わせたものを発想します。	有	有	有
15	自画像の構想を練るとき、「自分」のイメージにあった形や色、材料を選ぼうとします。	有	有	有
16	自画像の構想を練るとき、形や色、材料から発想すると表したいイメージが浮かびやすくなると思います。	有		有
17	自画像の構想を練るとき、日常や他教科で経験したり学んだりしたことを取り入れると、アイデアが広がると思います。	有	有	有
18	自画像の構想を練るとき、日常や他教科などで経験したり学んだりしたことなどを思い出しながら発想してみると自分のいろんな面が見えてくると思います。	有		有
19	自画像の構想を練るとき、日常や他教科などで経験したり学んだりしたことを生かさなくても、アイデアを練ることはできると思います。	有		有
20	自画像の構想を練るとき、先生や友達のアドバイスがあると自分のアイデアをもう一度見直してみようと思います。		有	有
21	日常や他教科で経験したり学んだりしたことを、制作に生かそうと思います。	有	有	有
22	これまで美術で学んできたことを生かせば、納得のいく自画像を制作できると思います。	有		有
23	日常や他教科で経験したり学んだりしたことを制作に取り入れると、納得のいく表現につながると思います。			
24	日常や他教科で経験したり学んだりしたことは、自画像の制作には関係ないと思います。			
25	先生や友達のアドバイスは、自画像を制作する上で必要ないと思います。			
26	いろいろな作家や友達の自画像を鑑賞すると、その人に対する見方や考え方が変わると思います。	有	有	有
27	いろいろな作家や友達の作品を鑑賞しても、その人の内面は理解できないと思います。		有	有
28	自画像を制作することにより、自分のことを今より意識すると思います。	有		有
29	自画像を制作しても、自分に対する見方は変わらないと思います。			
30	自分の自画像を鑑賞してもらっても、自分のことは理解してもらえないと思います。	有		有
31	日常や他教科で経験したり学んだりしたことを生かして自画像を制作すると、今よりもまわりのことに対して自分なりのいろいろな見方や考え方ができるようになると思います。			有
32	美術の時間以外にも、日頃から、形や色、材料などの造形的なよさや美しさを見つけようとしています。	有		有
33	日常や他教科において、形や色、材料などの造形的なよさや美しさに気づくと楽しいと思います。		有	有

上一成績上位群 下一成績下位群 全一全体



(2) 以下、仮説に関するアンケート項目の集計を分析し、考察した。

仮説 単元を構成する題材の導入段階において、日常の学びを意識する。

ア 本題材における学習場面

題材と日常との関係を整理し分析する中で、主題を構想する。

イ アンケート項目 1 7

「自画像の構想を練るとき、日常や他教科で経験したり学んだりしたことを取り入れると、アイデアが広がると思います。」

ウ 集計結果

表 4

	授業前 平均得点	授業後 平均得点	授業後 - 授業前 平均得点差	有意差 (5%水準)
上位群	3.80	3.91	0.11	有
下位群	3.50	3.56	0.06	有
全体	3.65	3.73	0.08	有

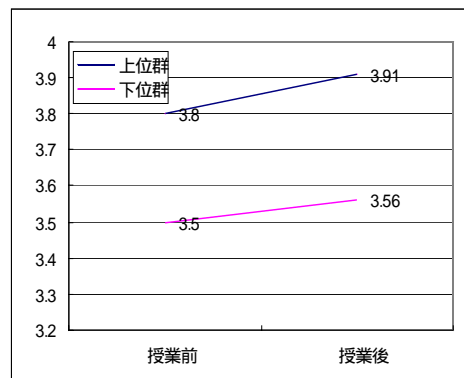


図 3

エ 分析

日々の学びを意識することによって、より豊かな主題の発想や構想ができることについて、上位群下位群とともに授業後でプラスへの変化がみられた。これは、自分をいろいろな切り口で分析することにより、自分に対する見方とらえ方が客観的になったり、新しい自分を意識したりするようになったからではないかと考えられる。また、表 3 より下位群に比べ上位群において効果があった。

オ 考察

日々の学びを意識することにより、主題を多角的にとらえ、新たなものの見方考え方ができることが確かめられた。

仮説 単元を構成する題材の構想段階において過去の学びを自覚する活動を行い、主題と形・色・材料による表現との関係を整理、分析する。

ア 本題材における学習場面

これまで身につけてきた鑑賞の能力を生かし、図像から読みとれる情報を言語として収集し、形・色・材料との関係に着目させながら主題を分析する。

イ アンケート項目 2 6

「いろいろな作家や友達の自画像を鑑賞すると、その人に対する見方や考え方が変わると思います。」

ウ 集計結果

表 5

	授業前 平均得点	授業後 平均得点	授業後 - 授業前 平均得点差	有意差 (5%水準)
上位群	3.86	3.97	0.11	有
下位群	3.56	3.68	0.12	有
全体	3.71	3.82	0.11	有

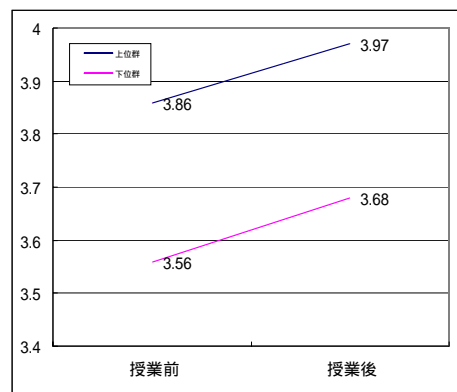


図 4

エ 分析

自画像作品の鑑賞を通して、多様な表現方法の工夫からその作者の思いが伝わってくること、形・色・材料を介してみると新たな理解ができるということについて、上位群下位群ともに授業後でプラスへの変化がみられた。これは、図像にある様々な情報と形・色・材料との関係について、それまで美術で学んできた形・色・材料に関する学びを想起しながら分析することにより、作者の思いが形や色と密接に関係していること、それぞれの個性が多様な表現方法となって表われていることに気付いたからだと考えられる。

オ 考察

過去の学びを整理分析することにより、新たな美術の学びを習得することができることが確かめられた。

仮説 に基づいてそれぞれが設定した主題と形・色・材料との関係を自覚し、新たな学習目標達成の構想を練る。

ア 本題材における学習場面

自分の主題を表すに必要な形・色・材料を収集する。

イ アンケート項目 1 5

「自画像の構想を練るとき、「自分」のイメージにあった形や色、材料を選ぼうとします。」

ウ 集計結果

表 6

	授業前 平均得点	授業後 平均得点	授業後 - 授業前 平均得点差	有意差 (5%水準)
上位群	4.11	4.33	0.22	有
下位群	3.83	3.95	0.12	有
全体	3.97	4.14	0.17	有

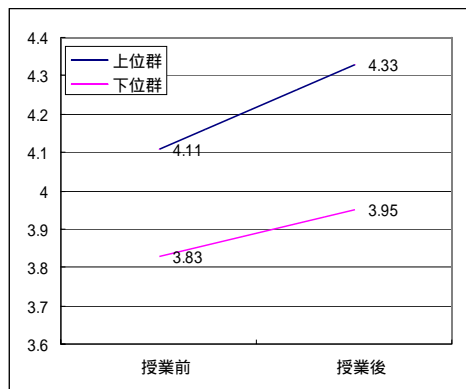


図 5

エ 分析

自分のテーマにふさわしい形・色・材料を選ぼうとする意識の変容が、上位群下位群ともに授業後でプラスへの変化がみられた。これは、ここまでの学習過程で主題と形・色・材料との関係を考えることが表現する上でいかに重要なものであるかが自覚され、活用しようとしたものと思われる。また、下位群より上位群に効果があった。

オ 考察

美術の学びと日々の学びの関係を整理分析させることで、形色材料に対する価値意識の高まりが確かめられた。

仮説 以上の学習過程を通して確かめられた形・色・材料に対する美的価値意識のもとで、過去の学びと日々の学びを活用して学習を進める。

ア 本題材における学習場面

主題と形・色・材料との関係を意識して、構想を見直したり修正しながら、形・色・材料を駆使して創造的に表現しようとする。

イ アンケート項目 2 1

「日常や他教科で経験したり学んだりしたことを、制作に生かそうと思います。」

ウ 集計結果

表 7

	授業前 平均得点	授業後 平均得点	授業後 - 授業前 平均得点差	有意差 (5%水準)
上位群	3.96	4.07	0.11	有
下位群	3.47	3.56	0.09	有
全体	3.65	3.73	0.08	有

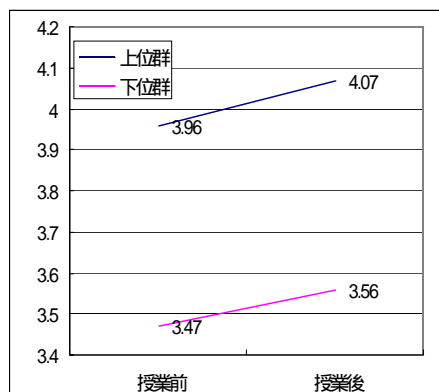


図 6

エ 分析

日々の学びを制作に生かそうとする情意について、上位群下位群ともに授業前後でプラスへの変化がみられた。しかし、関連アンケート項目の 23、24 では有意差は見られなかった。これは、制作段階において十分な制作時間が確保できなかったため、日々の学びを生かせたかどうか十分自覚できなかったものとする。

オ 考察

美的価値意識が高まることにより、学びをつなごうとする意識の高まりを確かめられた。

仮説 単元の最終段階で、新たに獲得したそれぞれの価値意識に基づく美的判断力を働かせて自他の表現や鑑賞の様子を評価する。

授業による検証ができていない。

(3) 鑑賞と表現を一体とすることによって生徒が何に気づき自覚しようとしているかを、生徒のワークシートの内容について分析を試みた。

ア 主題の発想構想段階で、鑑賞活動を行った後に、生徒のワークシートに書かれた内容を分類集計したところ、次のような主な記述とそれに対する上位群下位群での割合が見られた。

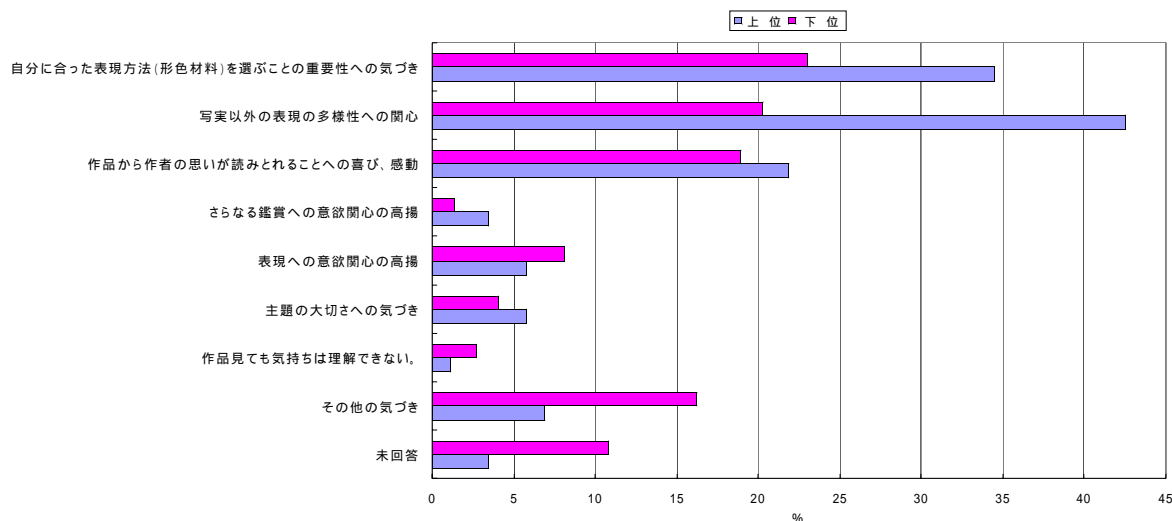


図 7

#### イ 分析

参考作品を鑑賞することによって主題と表現方法の関係に気づき、作者の思いが読みとれることを自覚、表現において形・色・材料との関係の重要性に気づき、自分に合った表現方法を考えよとする意識が上位群下位群ともに記述内容の主なものを占めている。その一方で、表面的なおもろさなどのとらえ方にとどまっているものや未回答などは、上位群に比べ下位群においてその割合が高くなっている。

ウ さらに、主な生徒の記述を紹介する。

自分にあった表現方法(形・色・材料)を選ぶことの重要性への気づき

- ・ 絵はその人の心の中を映し出しているような感じがする。だから、まねして描こうとしてもなかなか描けないのは、同じ気持ちではないからだと思う。
- ・ 参考作品のいろんな方法をまねてみたけど上手くいかなかった。やってみて初めてその人たちのすごさがわかった。
- ・ 自画像はそのまま描くのではなく、自分が一番主帳したいことや表したいこと伝えたいことを自由な形で描くことが大切だと思った。
- ・ 色の使い方、組み合わせ方、構図の考え方で自分の思いがこんなにも表すことができるんだなあと感じた。ただ描くだけでなく、様々なテクニックを使って立体的に表すとより深く自分の思いを表せそうだと思った。
- ・ 自分にあった表現で自分を表すことはとても重要だと思った。鑑賞する前より視野が広がり、視点が変わったと思う。色の他に材料も重要なことに気付いた。

- ・ 一言で自画像といっても本当に十人十色でそれぞれ全然違った。ありのままの自分をスケッチしたのもあれば現実にはあり得ない形や色彩で描かれたものもある。しかし、すべてが「自分」なのだ。わたしも今の自分を表現するために、ベストだと考えられる方法を駆使して取り組みたいと思った。

写実以外の表現の多様性への関心

- ・ わたしには「自我像」よりも「自画像」のイメージが強かったが、前進でも抽象でもよいことに気づき視点が広がった。
- ・ 自分を描くだけでなく、他のこともあり、その中にいろいろな想いが込められているのを知ってすごいと思った。
- ・ 自画像といわれたら、正面から描くことしか思いつかなかったが、作品を見ると場所や次元、形などは自由に決まり事なんてないことを知った。
- ・ 自分をすべて入れることが自我像ではないと思った。その時代、周りの人、想い、などでその絵は変わって来るんだなと思った。
- ・ 自画像とはただ自分をありのままに描くのではないということが分かり、自分の中の美術の世界が広まった。
- ・ 顔を描く以外の自分の表現の仕方が学べて参考になった。また、色の使い方によりその絵の雰囲気や作者の心情も伝わってきてより内面を表すことへの興味が深まった。

作品から作者の思いが読み取れることへの喜び、感動

- ・ 参考作品をからその人がどんな人なのか知ることができたので、自画像で自分のことが伝わればよいと思った。
- ・ 形や色によってその人の気持ちが何となくわかるからすごい。
- ・ 自分に合った個性的な絵であることに驚きを感じた。人それぞれ工夫してやっていることがすごい。
- ・ 絵というものはすごいものだなと思った。意志があるわけでもないのにその絵から訴えていることを読みとると本当に生きているみたいで、いろんな気持ちを表現できるのだなと思った。
- ・ 松本竣介の作品を見て、画家の描く自画像というイメージが変わった。そこから、内面的なことや心境まで読みとれてとても感動した。
- ・ 一見奇妙に思えるものも作者にとっては大切な意味があるのかと思う。下手な伝記より作者のことが伝わってきた。

さらなる鑑賞への意欲関心の高揚

- ・ 一枚の絵からたくさんのことがよみとれてとても楽しかった。もっといろいろな絵を見たい。
- ・ みているとその人の性格とかが伝わってきてすごいと思った。どうしてそう思うのか、どうすればそう思わせられるのかがよくわからないのでもっと鑑賞していきたい。
- ・ 誰も知らないような自分を表現できるし自分だけの思いを込められると感じた。時間があれば、もっといろいろな作品に触れてから制作に入りたい。鑑賞の力がついて深く読めるようになると自分の作品も今よりもっとよいものになりそうだなと思った。

表現への意欲関心の高揚

- ・ 参考作品のように上手く書くことは不可能だが、上手い下手ではなく本当の自分を見つけただけ相手にわかるように自分を表現していきたい。
- ・ 色・形・材料表現方法などからこんなにも様々なイメージを受けるのだということが分かり驚いた。自分も見人に見たい思いがすべて伝えられるような作品を作りたい。
- ・ 自画像というものは自分の顔を描くだけでなく、いろいろな発想を生かすものだなと思った。もっともっとたくさんを資料を集めてユーモアのある絵にしていこうと思った。
- ・ 制作を通して、自分の「自分らしさ」を見つけていきたいと思うようになった。

主題の大切さへの気づき

- ・ 伝えたい気持ちが見る人にわかるように 表現されているが、自分はまだ考え切れていていない気がする。
- ・ 自画像制作においては自分が自分のポイントを見つけていくということが大切だとわかった。
- ・ 伝えたい気持ちが見る人にわかるように表現されているが、自分はまだ考え切れていていない気がする。

## 鑑賞の難しさへの気づき

- ・ 絵を見てもその作者の気持ちは理解できないと思った。

## その他の気づきなど

- ・ 初めは模写のようなものしか思い浮かばなかった。自分の一番大切なものという視点に気付いた。
- ・ 自分は面白い作品に見せられる傾向にあることに気づいた。
- ・ ピカソの「もしも真実が一つなら、誰が同じテーマで百の絵を描こうか」という言葉の意味がやっと分かった。それぞれの見方は時や気分によって違って見える。そのことが分かってよかった。
- ・ 他人の作品を色々見ることによって「この人はどんなことを伝えたかったのか」を考え、自分の「これを伝えたい」がまとまった。
- ・ 自分を表現できることは、自分を深く見つめられて、これからに生かせると思った。
- ・ 自我像はそっくりに描かなくてもいい。
- ・ いろんな表現があっても面白い。

## エ 考察

表現と鑑賞を一体として扱うことにより、鑑賞活動で気づいたこと感じたことが、その後の表現活動を行う上で生かすことのできる力になることを自覚するとともに、鑑賞活動を通して形・色・材料に対する価値意識が高められ、それぞれの主題にあった表現方法や形・色・材料を選ぶことの重要性に気づき、その力を生かそうとする生徒の意識の高まりを確かめることができた。



生徒作品





### 自我像作品に込めたい想いは何かについての記述

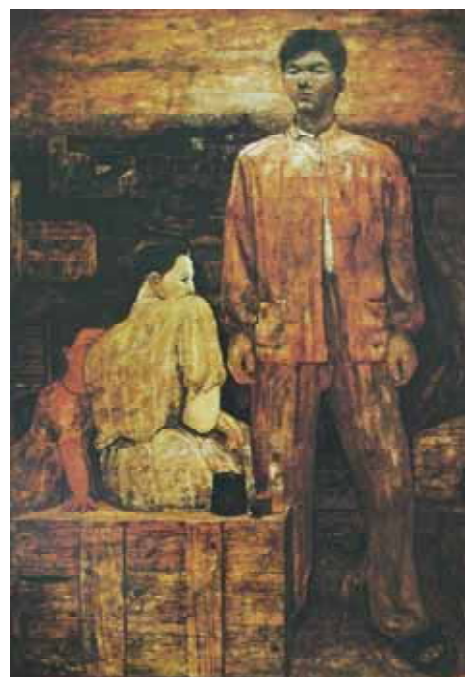
自分の良いと思う部分と悪いと思う部分の両方込めたい。特に悪いと思っている面に、嫌がらずに目を向けて、この作品を作ることを通してその部分の改善のヒントを見つけたい。

#### 分析

自我像制作（美術の学び）を通して、自己理解を深めようとする（日常を多角的にとらえようとする）姿が見られる。

### 自画像作品（松本俊介作品）を鑑賞したときの記述

見えるもの	分かること
立っている男性、 ネコ車、建物、女の人、 子供、スリッパ、 木の箱、 ボトルにPOP、 空（夕焼け？） サイン、町、レンガ 倉庫か工場、階段	3人は家族？ 日本人、 女性が男性から 身を引いている。 男性を 愛せていない。 夕方、朝方 筆洗と油 男性は画家 オレンジ戦火 黒 闇 黒こげ やけ野原
感じたこと思ったこと考えたこと	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・夕焼け、日が暮れて夜が来る、 戦争が始まって闇が来るということを象徴しているのではないか。</li> <li>・夕焼けな何となく寂しげで不安な感じがする。</li> <li>・オレンジと黒を使っている。混じり合う期待と不安の表われか。</li> </ul>	



松本俊介「画家の像」1941

#### 分析

図像からさまざまな情報をひきだすとともに、関係を整理することにより、新たな情報をひきだしていく。そして、色や形などに着目しながら、主題を読み解こうとしている。美術の学びと日々の学びをの関係を整理し分析している姿といえよう。

### 主題の発想、参考作品鑑賞後の記述

自画像とはすべて自分の姿を写真のようにそのまま描くだけのもと思っていたが、写真とはちがって自分の想いを自由に込められるんだと分かって、おもしろいと思った。

#### 分析

表現の可能性を自覚し、自分の主題を形・色・材料を通して表現することへの価値を感じている。美術の学びと日々の学びの関係から導き出された新たな「知」を自覚している姿といえよう。

自画像制作の構想（アイディアスケッチ）

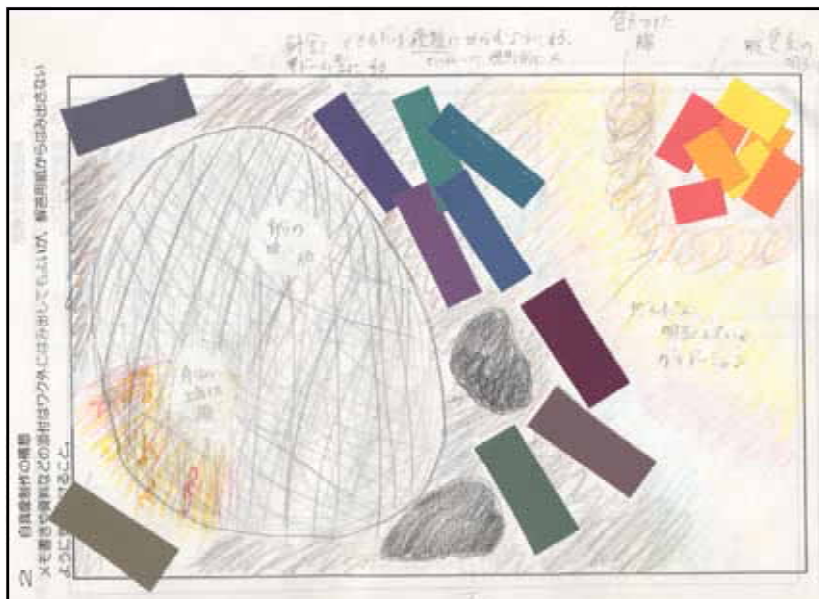


図12

分析

表わしたいイメージをどんな形・色・材料に置き換えるか、どのように画面を構成すればよいか、配色カードをはり付けたり色鉛筆で彩色したりして制作の構想を簡単なスケッチではあるが、十分に表したものになっている。またここでは、スケッチでは説明しきれないものはメモで表すように指示しているが、ポイントとなる点がしっかりと示されている。

完成作品



図13

分析

この生徒は、デッサン力がありある生徒ではないが、自分のテーマを表現するために、描画材料以外に針金や石写真のコピーなどを準備し、その特性を生かした加工方法などを用いて、創造的に工夫しながら表現している。今の自分の内面を表現しようとしたとき、この生徒なりの価値意識に基づいて集められた形や色・材料を集め、再構成し新たな表現を作り出すことに成功している。自分なりの美的価値意識に基づいて美的判断力を働かせているといえる。

8 研究のまとめと今後の課題

(1) 全体としてのまとめ

これまでの研究で、美術科で積み重ねてきた表現や鑑賞の能力は日常の学びと結びつけることで深化拡充し、生徒が主体的になったことが確かめられた。さらに生徒は、鑑賞と表現を一体とした教科課程で学ぶことで、鑑賞活動によって形・色・材料の価値意識を高め、表現活動において美的判断力を働かせて自分の主題に沿った形・色・材料を選び出し創意工夫しようとする事が確かめられた。

次に、今回の研究についての問題点を挙げる。

アンケートを実施するに当たって、因子分析による仮説と質問項目との整合性が得られていないこと。



研究計画が不十分で授業では構想までしか指導できず、すべての仮説について検証できなかったこと。

本研究では、平面作品を鑑賞の対象に取り上げる傾向にあったこと。今回の教科課程の提案は本題材においてのみ有効なのではなく、立体作品においても有効であることを示す必要があったこと。

今後の課題としては、中学校教育課程における美術科の果たす重要性を広く一般に認知してもらえるようにするための具体的な手だてについて研究していくことが重要であると考え。厳しい現状であるからこそ、美術科教育の成果を示していかなければならない。その方法の一つとして、本研究で明らかにしてきた、表現と鑑賞を一体として扱う考え方のもとに美術科教科課程を構築することの必要性を提案したい。その根拠として、平田朝一の調査(岡山県下の公立中学校美術科担当者を対象とした鑑賞授業に関する実態調査)によれば、「鑑賞授業で困っていること、消極的になってしまう理由」として、「授業時数が少ないので、鑑賞に充てる時間が少ない。」という回答が58.8%であったとしており、指導者の多くが表現偏重の考え方から脱却できていない現状を示していると思われるからだ。こうしたことから、積極的に表現と鑑賞の質的なバランスを図った教科課程を構築していくことが、限られた授業時数においても美術科の目標達成に有効であることを示していきたい。

#### 参考文献

- |               |  |                              |      |
|---------------|--|------------------------------|------|
| 新井秀一郎         | 「実践造形教育体系 25 美術の鑑賞」                          | 開隆堂                          | 1982 |
| 遠藤友麗          | 「中学校 新美術科授業の基本用語辞典」                          | 明治図書                         | 2000 |
| 緒方俊昭          | 「自分創りの旅を扶ける美術科学習指導」                          | 佐賀大学文化教育学部附属中学校              | 2001 |
| 平田朝一          | 「美術科における鑑賞教育の普遍化を目指して<br>～身近なものからの鑑賞の可能性～」   | 岡山大学大学院教育学研究科(現・邑久町立邑久中学校教諭) | 2002 |
| 森 弥生<br>赤木里香子 | 「中学校美術科の支援資源としての美術館<br>ー倉敷デジタル美術散歩の実践からー」    | 「美術教育学」第25号<br>美術科教育学会       | 2004 |
| 森 弥生<br>須々木攻平 | 「個性に応じた新たな表現活動につながる自己評価の<br>能力態度を育成する指導法の研究」 | 研究紀要 第24号<br>岡山大学教育学部附属中学校   | 1996 |
| 武本賢治<br>森弥生   | 「鑑賞学習を手がかりに探る小中の系統性を生かした<br>中学校美術科の教育課程のあり方」 | 研究紀要 第28号<br>岡山大学教育学部附属中学校   | 2000 |
| 武本賢治<br>森弥生   | 「日々のさまざまな学びを視野に入れた中学校美術科のあり方」                | 研究紀要 第35号<br>岡山大学教育学部附属中学校   | 2002 |

